

ひとが投資をするとはどういうことか

「自己形成としての投資」に関する概念分析と価値提案

概要

京都大学大学院文学研究科哲学専修・出口康夫教授、同成長戦略本部・渡邊一弘特定助教は、(株) お金のデザイン社・取締役副会長／ファウンダー廣瀬朋由氏との産学連携共同研究「ひとが投資をするとはどういうことか—『自己形成としての投資』に関する概念分析と価値提案」の成果として、このたびホワイトペーパーと関連資料を発表しました。

人生を豊かに安心して過ごすための資産形成をしようと思うならば、「長期・分散」型の運用方針が有効であることには、理論的にも経験的にも相応の裏付けが存在します。しかし頭ではそうわかっているにもかかわらず、不安定な経済や市場の動きを目の当たりにすると、多くの人は投資に尻込みをしたり、途中で止めてしまったりするものです。このことは金融機関にとってビジネス上の悩みとなります。しかしその背後には、「お金」や「経済的利得」の話に留まらない、人間の意思決定や実践にかかわる哲学的に興味深い問題が横たわっています。

本研究では「ひとが投資をするとはどういうことか」という根源的な問いを設定し、アリストテレスや西田幾多郎、現代の物語的自己論が教える哲学的概念や理論を渉猟しつつ、「自己形成としての投資」という観点から資産形成の本質を考察しました。今後はこの考え方をさまざまな現場で活用することで、私的な価値の追求と公共的な価値への配慮とが互いの実現を促し合うような実践を、広く社会に生み出していくことを目指します。

1. 背景

出口教授は哲学のミッションを「価値の提案」と位置づけ、哲学を社会に実装するための産学連携研究や発信活動を積極的に展開しています。そうした活動の中心には、出口教授が提唱する「われわれとしての自己 (Self-as-WE)」という概念があり、近年はとくにその観点から、新たな「しあわせ」の捉え方を構想しています。

たとえば、一般に「ウェルビーイング (well-being)」は、何らかの望ましい状態が達成された静的なものと捉えられることが多いですが、Self-as-WE の考え方では、人間の動的な身体行為に着目し、行為が目的に向かって円滑に進行していること、すなわち遂行順調性としての「ウェルゴーイング (well-going)」を重視します。

一方で、お金のデザイン社のような金融機関も、人々の幸福や価値観を、行為実践との関連から深く再考せざるをえない状況にあります。新NISAのスタートにより「貯蓄から投資へ」という流れが加速すると期待されているものの、資産運用を主体的に継続する人の割合は、まだそれほど高くありません。近年、ゴール投資という考え方が普及しつつあり、まず中長期的なゴール(目標)を設定し、そこから逆算して資産運用計画を立てる手

法が注目されています。しかし、目標を定め計画を立てることと、実際に行為に踏み出すことは別の問題であり、合理的な認識だけでは行為を駆動することも、継続することも難しいのが実情です。

本研究は、出口教授を代表として過去に行われた、お金のデザイン社との共同研究（『しあわせ』の再定義と定量的尺度作成のための調査研究 ～個人の価値実現をサポートする金融サービスのあり方を哲学的見地から検討～）をさらに発展させるものです。投資や資産形成を単なる経済活動にとどまらない人間の営みとして捉えたとき、それは個人の生き方や社会のあり方にどのように関わるのでしょうか。今回の研究の目的は、自己と幸福に関する哲学的考察を通じて、この問いに対するひとつの答えを提示することです。

2. 研究手法・成果

第一期共同研究（2021～2022年度）では、「しあわせ」を構成する多元的な価値を可視化する尺度「ライフ・インテグレーター」を開発しました。今回の第二期共同研究（2023～2024年度）では、このライフ・インテグレーターを資産形成に活用するための基本的な考え方を整理しました。ポイントとなるのは、「投資」や「資産形成」という概念そのものを分析し、そこに含まれる「作る」「委ねる」という行為に着目したことです。そして、「自己」と「ナラティブ」に関する国内外の先行研究を踏まえながら、具体的に以下の考察を進めました。

まず、長期の資産形成において、目標設定に基づく合理的なアプローチが必ずしも機能しないという事態を「ゴール投資のパラドクス」として定式化しました。次に、このような機能不全を乗り越えるために、資産形成を自己形成の一環と捉え、それら二つの「作る」行為が互いを充実させながら循環的に進んでいく関係を明らかにしました。また、投資を「目的が内在する行為」、すなわちアリストテレスのいう「エネルゲイア」として捉えることで、ロングタームの資産形成を単純なゴール投資の枠組みとは異なる視点から理解できることを示しました。さらに、ライフ・インテグレーターによって可視化された「しあわせ」のスナップショットに時間的な方向性を与え、行為を駆動する個人のナラティブへと発展させるための試みとして、生成AIを用いたストーリー作成を実践しました。

3. 今後の予定

ライフ・インテグレーターによって価値観の骨格を可視化し、AIが生成したストーリーをシグナルとして、自分らしく肉付けされたナラティブを言語化する。このようなステップを踏むことで、自分自身にも捉えがたい「しあわせ」のかたちを実践へと「行為化」することが可能になると考えられます。

本研究が提案するこの枠組みは、まずはお金のデザイン社の顧客を対象とした意思決定サポートツールの基盤として活用される予定です。その実践事例をもとに、より一般的な文脈での活用が可能となるよう、アプローチと手法の検討を進めていきます。

また、哲学的な観点からは、ウェルゴーイング（well-going）の概念をより精緻化し、

適切な尺度化を行うことで、それを政策効果測定へと発展させることを目指します。

4. 研究プロジェクトについて

哲学的アプローチによるファイナンスの新たな価値に関する共同研究II

<研究者のコメント>

「人文学、特に哲学は『新たな価値の提案』の学です。一方、過去1世紀ほど、哲学においても、専門化・細分化—Th.クーンの言葉を借りれば—『通常科学（normal science）化』が進み、このような哲学本来のあり方が見失われる傾向がありました。21世紀も中葉を迎えつつ、一層混迷を深めつつある世界を前にして、哲学は、今一度、『価値提案の膂力』を鍛え直す必要があります。今回の共同研究プロジェクトは、このような『鍛え直し』の一助ともなりうるのではないかと期待しています。」（出口康夫）

「『お金』を通じて、一人ひとりが自分らしく生きることを応援することが会社のビジョンです。<https://www.money-design.com/about/>

人生と資産形成とは表裏一体と考えます。無色透明・客観的な価値でしかない『お金』を、自分の『しあわせ』色に染めた『お金』として提案していくことが、今後のあるべき金融機関の使命だと考えています。共同研究第二期では、特に本研究が資産運用を生活の指針にも活用できればと思っております。」（廣瀬朋由）

「哲学をビジネスに活かそう、ビジネスにも哲学的思考が必要だ、などと言われるのを耳にするのもここ数年で珍しいことではなくなりました。しかし、哲学の知識やスキルをビジネス向けにパッケージ化して提供するだけでは、大して面白いものは生まれなかもしれません。もっと大事なのは、フィールドを異にする者どうしが対話をつうじてお互いの思考のブラインドスポットを照らしあい、そこにあるものをともに言語化していくことではないでしょうか。この共同研究を通じて、そのような思いを強くしました。」（渡邊一弘）

書誌情報

【URL】

<https://www.money-design.com/news/filedownload.php?name=394cb38aa734b5a7df4fa5960ec64ee3.pdf>

【書誌情報】

出口康夫, 渡邊一弘, 廣瀬朋由. 「ひとが投資をするとはどういうことか—『自己形成としての投資』に関する概念分析と価値提案」. お金のデザイン. 2025-3.